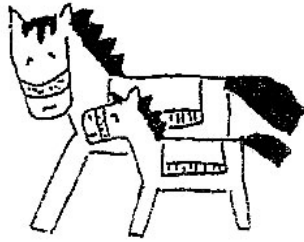


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

31年 3月 NO.292



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://oumanooyako.sakura.ne.jp/>

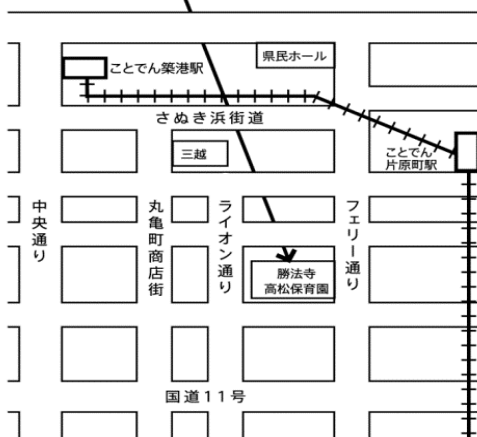
(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		3月の主な活動	～お気軽にどうぞ～
3月 9日	土	体験保育 10:00～12:00	同じ年齢のクラスに入って 一緒にあそびましょう。
3月 14日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	本屋（ルヌガンガ）店主中村勇亮氏に 本のことについての話やフリートーク します。おいで下さい。
3月 15日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「春を感じて！」をテーマに 手あそびや大型絵本・わらべ唄も ありますのでどうぞ。
3月 16日	土	体験保育 10:00～12:00	出産予定の方も子育て体験を してみましょう。
3月 16日	土	絵本と小物づくり 14:00～16:00	手品のように絵がかわり、お話が ぐるぐるくり返す不思議なシアターを つくります。（予約要）
3月 22日	金	健康・育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科）にゆっくり 相談できます。（予約要）

・火～土の9:00～18:00までは、園内開放して
いますので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9:00～18:00
しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童話全集 ③
JULIA出版社 上

来つ虹みこ町飛わわ
たかかせのの行かか
んいらよ虹人機っ
だに うにはた、た、
よ。 と、

急虹飛し
いの行く
で輪機れ
のはの
な、空
かから
へと

虹飛虹町
を行をの
み機見人
た見たは
に出は
て じめ
て

虹と飛行機

☆今月の内容— 立ち上がる「イクジイ」たち

立ち上がる「イクジイ」たち



6月下旬、東京都中央区のビルの一室で、「イクジイスクール」が開かれた。育児をする父親が集まる NPO 法人「ファザーリング・ジャパン」(FJ)が昨秋に続いて企画し、約 10 人が参加。子育てに関心がある中高年男性を対象に計 5 回、元 NHK アナウンサーの村上信夫さんらが孫世代と関わる喜びや育ての意味について説いた。

この日の講師役、FJ 創設者の安藤哲也さん(49)は、「少子化は日本の大ピンチ。これまで会社で一生懸命働いて豊かな社会を築いてきた皆さんが、今度は『イクジイ』として立ち上がることで、社会の未来は明るくなっていく」と語りかけた。

共働き家庭が増えた一方で、長時間労働は続き、子どもを生き育てることが難しい時代を迎えた。子育て世代は、保育園の送迎や遊び相手に、時間に余裕があるイクジイの助けを求めている。仕掛け人のイクメン、村上誠さん(41)は「子どもに自分の時間を使うのは社会的に意義のあることで、『世直しだ』と話す、参加者の目の色が変わる」。高齢者が子どもと触れ合い、元気であることで、介護問題の緩和につなげることも「裏テーマ」という。

「放課後」の懇親会では、ビールを片手に「孫育て」議論に花が咲いた。4 人の孫がいるという男性(71)は、「現役時代は働きづめで、自分の子育ては眺める程度。罪滅ぼしに何かできないかと参加しました」。まだ孫はいないものの、第二の人生のために参加したという公務員(57)は「職場では『孫ができたなら祖父ながら育休(有給)を取る』と公言しています。愛情のかけすぎには問題がないというのが持論」と語った。

このイクジイスクールにゲストとして招かれた岡村紀男さん(71)は、通称「スーパーイクジイ」。自分には子どもや孫がいないが、昨年 6 月から東京都大田区の自宅を「じいちゃんち」として月に 4 回前後開放し、地域の幼い子ども連れを迎え入れている。

現役時代は聖学院大学キャリアサポートセンターの所長を務めた。学生の

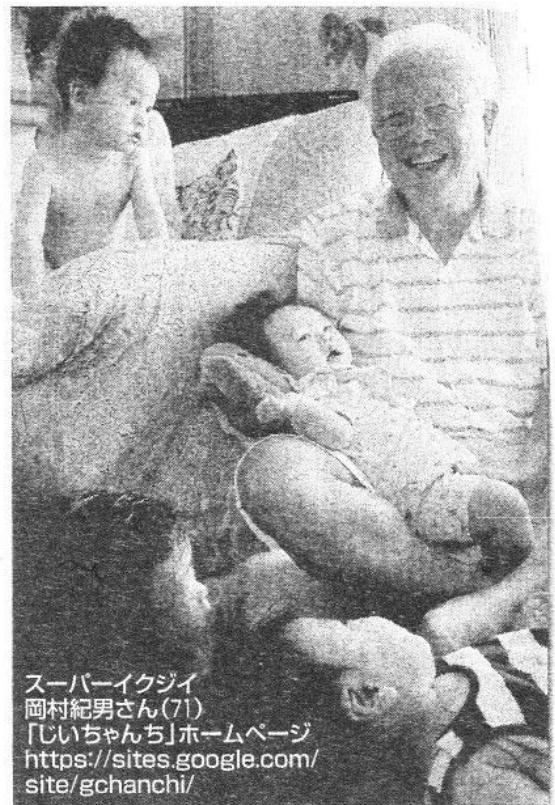
面接指導や企業訪問に明け暮れ、67歳で完全にリタイアした時は疲れ果てていた。1年ほどは何もする気になれなかったが、次第に「周囲に人はたくさんいるのに、自分が離れ小島にいるような孤立感が深まった」。早朝に家を出て、夜遅くに帰るサラリーマン生活を40年続け、気づけば地域に無縁だった。やりたかった読書をして、目が衰えていて長い時間は読めない。

「地域と関わりを持ちたい。人とのつながりの中で生きたい」と強く思うようになった。ある日、区民便りで「地域と教育」講座の存在を知り、「これだ」と急いで申し込んだ。そこで知り合った仲間4人と開いたのが「じいちゃんち」だ。

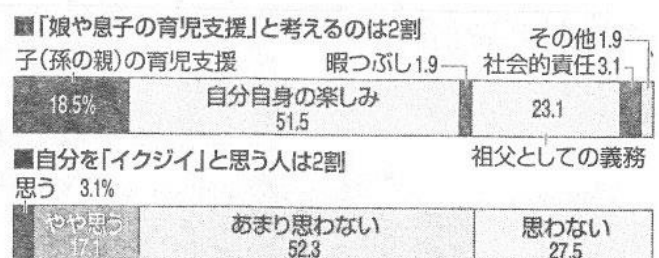
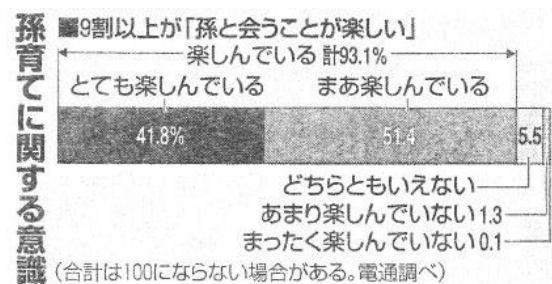
18畳のリビングで、地域の親子と一緒に過ごす。ベランダでプール遊びをした夏は、多い時で14人の子どもがやって来た。ほぼ毎回参加するという母親(32)は「子どもと親だけでは息が詰まる。こうした場があってとても助かります」と話した。

団塊世代の大量退職によって、イクジイへの期待は高まっている。昨年7月に創刊した雑誌「孫の力」は、「孫に読み聞かせ」「孫と旅行」「孫と同居」といった特集を続け、隔月で5万部が出ているが、定期購読者(約1800人)の6割が男性だという。

小黑一三編集長(62)が中国の長寿村で4世代同居をみて、「とてもぜい



スーパーイクジイ
岡村紀男さん(71)
「じいちゃんち」ホームページ
<https://sites.google.com/site/gchanchi/>



たく」と感じたことなどから、企画を立ち上げた。「日本の男性は孫に興味がありながら、つきあい方がわからない。ノウハウを紹介する雑誌があってもいいと思った。男は妻や子どもとの関係に傷ついている、孫とは無償の愛によって美しい関係になれる」と話す。

一方で、蓄えが多い祖父母世代が孫のために物を買って与える「孫消費」への期待も高い。電通の「育G(イクジイ)調査」によれば、年間の平均は11万円。「孫の力」でもホームページから孫のために買い物ができたり、百貨店とタイアップして「孫消費」を狙ったフェアを開催するなどビジネス展開を構想しているという。



雑誌「孫の力」と
監修の島泰三さん

雑誌「孫の力」の監修者で、中公新書から同名の著書もある霊長類学者の島泰三さん(66)に、孫の力とは何かを聞いた。

男の老人は子育てができなくていい。子どもと一緒に、ただほほえんでいるだけでいいんです。お地蔵さまのほほ笑みの輪を広げたい。

「ちゃんと育てなきゃいけない」という意識が先に立つ親と違い、祖父は無条件に愛を注ぐことができる。「あなたはすごい」と手放しでほめられた子どもは大きな自信を人生に対して持つ

ことができる。それが大切な役割です。

そして孫は「弾む心の波動」をこちらに送ってくれる。「おじいちゃん、死なないで」と言われたら、生きる力を与えられる。

子どもは未来そのものです。人生のたそがれどきに出会う彼ら、彼女らが大成する場面には立ち会えませんが、子どもたちにどんな社会を用意するか、私たちに責任があると思っています。

『朝日新聞』